

てんぐの話

Story of a Tengu

小泉八雲作・山宮允訳

登場人物

坊さん

法師（てんぐ）

子供

一場

◆後冷泉天皇の御代。坊さんが京都からの帰り道、とびを助ける。
◆ナレーター、坊さん、子供

後冷泉天皇ごれいぜいてんのうのとき、京都きょうとに近い比叡山ひえいざんの西塔寺さいとうじにひとりのえらい坊さんぼうさんがいました。ある夏なつの日に、そのりっぱな坊さんぼうさんが京都きょうとをおとずれてかえるとちゆう、北きたの大路おうじで数人すうにんの子供こどもたちがとびをいじめているのを見みました。その子供こどもたちは、わなでその鳥とりをとらえ、棒ぼうでたたいているところでした。

坊さん 「おお、かわいいそうに！」

と坊さんぼうさんは同情どうじょうして叫さけびました。

坊さん 「おまえたち、どうしてそんなに鳥とりをいじめるのかね。」

ひとりの子供こどもは答こたえていいました。

子供 「殺ころして羽はねをとるんだ。」

坊さんぼうさんはあわれみの心こころをおこして、持もってきていた扇おあぎととりかえっこして、そのとびを自分じぶんに渡わたせといいました。それからその鳥とりをはなしてやりました。鳥とりはそれほどひどくけがもしていませんでしたので、飛とびさることができました。

◆坊さんの前に法師(てんぐ)が現れ、お礼をしたいと言う。
◆ナレーター、坊さん、法師

良いことをしたと嬉しく思いながら、坊さんはまた道を歩いていきました。そう遠くまで行かないうちに路ばたの竹やぶから、見覚えのないひとりの法師が出てきて、自分の方へ急ぎ足でやってきました。法師はうやうやしく、坊さんにあいさつをして、
こういいました――

法師 「お坊さま、あなたのおなさけで命が助かりました。
それで今、しかるべき形でお礼の気持ちをあらわしたく
ぞんじます。」

こういわれて坊さんはおどろいてこう答えました。

坊さん 「前にあなたをお見受けしたおぼえはまったくありませんが、
いったいどなたでしたらう。」

法師 「こんななりでは おわかりにならないのも むりは
ございません。」

と法師は、答えました。

法師 「わたしは北の大路で、あのいたずら小僧たちに
いじめられていた大とびでございます。おかげで命が
助かりました。この世で命より尊いものはございません。
それでどうかして今あなたの御親切におむくいしたいのです。
もし何かあなたが、手に入りたい、とおのぞみになるものが
ございましたら、つまりわたしは できますことならなんでも、
ごえんりよなく おっしゃってください。実はわたしは

六つの神通力を、しようしよう持ち合せておりますから、あなたがあのぞみの願いごとは、たいていかなえられます。」

この話をきいて坊さんは、てんぐと話しているのだとわかりました。それであからさまにこう答えました――

坊さん 「わたしはもう長い間この世のことにはとんちやくしなくなっています。もう、七十ですし――どんな名誉も楽しみもわたしの眼中にはありません。ただ死んでから後のことだけが気にかかるのです。が、それも誰にも助けてもらえないことですから、かれこれ考えてもむだでしょう。実は、お願いしたいことは、ただ一つしか思いあたりません。わたしはお釈迦さまの時代にインドにいて、とうとい耆闍屈山の大会合に加われなかったことを一生ぎんねんに思っています。朝晩のおつとめに、このことをぎんねんに思わない日は一日とてもありません、ああ、もし仏様のように、時間や空間を超越していることができたら、そのふしぎな会合を拝見できたならば、どんなに嬉しいでしょうか。」

法師 「さあ。」
とてんぐは大きな声でいいました。

法師 「その信心深いあなたの願はやすやすとかなえさせてあげられます。わたしは、はげたか山の会合をよくおぼえています。だからありのままに、そこにあつたことをそっくりあなたの前に再現することができます。こんな尊いことを再現するのは、わたしどものこの上もない喜びです。」

……さあ、こちらにいっしょにいらしてください。」

そこで坊さんは いわれるままに丘の斜面のまつ林の中に案内されました。

法師 「さあ。」

とてんぐはいいました。

法師 「しばらく眼をとじて待っていてください。仏さまが法を説かれる声が聞えるまで眼を開かないようにしてください。

そうしていると、ものが見えてきます。しかしあなたが仏の姿を見られても、どんなふうにでも、けっしてありがたさに心を動かされてはなりません。たとえば、おじぎをしたり、おいのりをしたり、また『仏さまいかにも』

とか、また『ああ、ありがたい仏さま』というような声をだしたり、また物をいったりしてはなりません。何か少しでも ありがたいようなふうをされると、たいそう不幸なことが、わたしにおこりますから。」

坊さんは 喜んでこの警告に従うことを約束しました。そして、てんぐはそのみもの、の用意をするもののごとくに、急いで立ちさりました。

◆坊さんの願い通り、目の前で釈迦が説法する様子が再現される。
◆ナレーター、坊さん、法師（てんぐ）

日は傾き、暮れました。そして、あたりが暗くなりました。年とった坊さんは目をとじて、木の下にしんぼう強く待っていました。とうとう不意に上の方に声がひびきわたりました、大きな鐘の鳴るような沈んだ、すんだふしぎな声——法の道をお説きになるお釈迦さまの声がひびきわたりました。それから明るい光にうたれて、目をあけて見ると一切の物が変っているのです。場所はまぎれもない、尊いインドのはげたか山でした。そして時は妙法蓮華経を説きたもう時でした。もうまわりにまつの木はなくなつて、ただ美と宝石のついた七重宝珠のふしぎな光りがかがやく木がありました。そして大地は天からふる曼陀羅華、曼珠沙華の花でおおわれています。そして夜空によい香りとかがやくと、美しい大音声が満ちわたりました。そして、世界の上にかがやく月のように、中空に光りがやいている仏さまが、右には普賢、左には文殊を従えて獅子の座に座っておられるのが坊さんに見えました、それからその前には、きら星のごとくに、菩薩、魔訶薩の群集が、雲か霞のような「諸天、夜叉、龍、阿修羅、人、非人」の大衆をひきいて、集まっていました。坊さんは舍利仏も見えました。迦葉、阿難陀、その他如来の弟子たちも、すべて見えました。——諸天の王たちも、火の柱のような四方の王たちも、大龍王たちも、乾達婆も迦楼羅も、日と月と風の神たちも——それから、梵天の空にかがやく、無数の光も見えました。それから、これらの

数えきれないほどの、栄光の集りのはるかむこうに、未来永劫を
つらぬくように、お釈迦さまの額から出ている一すじの光明に
照らされて、百八十万の東方の佛土と、そこに住むすべてのもの
——それから涅槃に入っ、寂滅した もろもろの佛の姿まで
見えました。これらの、またもろもろの神、および夜叉すべてが
獅子の座の前に頭を下げているのが坊さんに見えました。それから
無数の群集が、お釈迦さまの前に海のうなりのように、お経を
となえているのが聞えました。その時、坊さんは さっきの約束を
忘れて、おろかにも、自分は ほんとうに仏の前にいる夢心地になって、
慈愛と感謝の涙を流して、身をかがめて礼拝しました。そして、
大きな声で、
坊さん 「おお、ありがたい仏さま……」
と叫びました。

するとすぐに地震のような打撃とともに、この大きなみものは、
消え失せてしまいました。そして坊さんは、山腹の草の上
ひざまずいて、暗闇の中ただひとりであるのでした。そして坊さんは
いいようのない悲しい気持になりました。このまぼろしが消え失せ、
分別がたりなくて前の約束を破ったからです。で、坊さんは
悲しい気持で、家路につきました。するとまたふしぎな山法師が
あらわれて、坊さんにとがめるような、切なそうな語調で
こういいました——

法師 「あなたがわたしに約束なさったことをお守りにならないで、
分別なくあなたの気持をあらわしたから、教義の
守護役である護法天童が、とつぜん天からわたしたちの所へ

舞まいおりて来て、とても怒おこって、『どうしておまえたちは
信心しんじんぶか深い人ひとをこんなにだまそうとするのか』といって
わたしたちをぶちました。それでわたしがやっと集あつめた
法師ほうしたちもこわがって逃にげてしまいました。わたしも、
翼つばさが一つ折おれたので、もう飛とぶことができなくなりました。』
こういって、てんぐは永久えいきゆうに姿すがたを見せなくなりました。

〈完〉

原案

『十訓抄』 卷上第一

可定心操振舞事より

「比叡山の天狗」

後冷泉院御位の時、天狗あれて、世の中騒がしかりけるに、
比叡山の西塔に住みける僧、白地に京に出でて、帰りけるに、
東北院の北の大路に童部五六人ばかり集まりて、物を打領じけるを、
歩みよりてみれば、古鳶のしぼりからめて、楚にて打ちけり。
「あないみじ。などかくはするぞ」

といへば、

「殺して羽をとらん」

といふ。

この僧、慈悲を発して、扇をとらせてこれを乞ひちやりつ。

ゆゆしき功德つくりつひて、ゆく程に、きれ堤のほどに藪より
異様な法師の歩み出でて、後れじと歩みよりければ、けしき覚えて、
かたかたへ立ちよりて、過さんとしける時、彼の法師 近よりて
いふやう

「御憐を蒙りて命生きて侍れば、その悦び聞えんとてなん」

といふ。

僧、たち歸りて、

「えこそ覚えね。誰人にか」と問ひければ、

「さぞおぼすらん。東北院の北の大路にて、からき目みて侍りつる
老法師に侍り。生ける者は、命に過ぎたる物なし。かばかりの
御志には、いかでか報じ申さざらん。然れば何事にも、念比なる
御願あらば、一事かなへ奉らん、己はひたるらん、小神通を
得たれば、何かはめづらかなるひながら、こまやかにいへばはこの世の
望更になし。年七十になりたれば、名聞・利養もあじきなし。」

後世こそおそろしけれども、それはいかでかふべきなれば、申すに及ばず。但し釈迦如来の、靈山にて説法し給ひけん粧こそ、いかにめでたかりけん夕心にかけて、見まほしくおぼゆれ。そのありさま学びて、見せたまひてんや」

といふ。この法師

「いよやすき事なり。さやうの物のまねするを、おのが徳とするなり」

といひて、さがり松のうへの山へ具して上りぬ。

「ここにて目をふさぎて居たまへ。仏の説法の御声聞えん時に、目をばし、あなかしこ、たふとしとおぼすな。信だに発したまはば、おのれがためあしかりなん」

といひて、峯のかたへのぼりぬ。

とばかりして法の御声聞えければ、目をあけたるに、山は靈山となり、地は紺瑠璃となり、木は七重宝樹となりて、釈迦如来、獅子座の上におはします。普賢・文殊、左右に座し給へり。菩薩・聖衆、雲霞のごとし。帝釈・四王・龍神八部、所もなくみちみてり。そらより四種の華ふりて、香しきかほり四方に満ち、天人雲につらなりて、微妙の音楽を奏す。如来、宝華に座して、甚深の法門を演説し給ふ。そのことがら、大かた心も言葉も及びがたし。

しばしこそ、いみじう学び似せたるかなと、興ありて思ひけれ。

さまぎまの瑞相を見るに、在世説法の砌に臨みたるがごとし。信心忽ちおこりて、随喜の涙、眼にうかび、渴仰の思、骨にとほるあひだ、手を額にあてて、歸命頂礼するほどに、山おびただしくからめきさわぎて、ありつる大会、かきけすやうに失せぬ。夢のさむるがごとし。

こはいかにしつるぞと、あきれまよひて見まはせば、もとありつる山中さんちゅうの草深くさふかなり。あさましながら、きてあるべきならねば、山やまへ上のぼるに、水みずのみのほどにて、ありつる法師ほうし出いで来きて、

「さばかり契ちぎり奉たてまつりつることをたがへて、いかで信しんを発はっし給たまひつるにか。信力しんりきによりて、護法天童下り給たまひて、かばかりの信者しんじゃをみだりにたぶらかすとて、我われらをさいなみ給たまへる間あいだ、雇やとひ集あつめたりつる法師ほうしばらも、からき肝きもつぶして逃にげさりぬ。おのれ、片方かたほうの羽はねかひうたれて、術じゆつなし」

といひて失うせにけり。

〈完〉

Story of a Tengu

Lafcadio Hearn

In Japanese popular art, the Tengu are commonly represented either as winged men with beak-shaped noses, or as birds of prey. There are different kinds of Tengu; but all are supposed to be mountain-haunting spirits, capable of assuming many forms, and occasionally appearing as crows, vultures, or eagles. Buddhism appears to class the Tengu among the Mârakâyikas.

In the days of the Emperor Go-Reizei, there was a holy priest living in the temple of Saito, on the mountain called Hiyei-Zan, near Kyôto. One summer day this good priest, after a visit to the city, was returning to his temple by way of Kita-no-Ôji, when he saw some boys ill-treating a kite. They had caught the bird in a snare, and were beating it with sticks. "Oh, the poor creature!" compassionately exclaimed the priest;—"why do

you torment it so, children?" One of the boys made answer:—"We want to kill it to get the feathers." Moved by pity, the priest persuaded the boys to let him have the kite in exchange for a fan that he was carrying; and he set the bird free. It had not been seriously hurt, and was able to fly away.

Happy at having performed this Buddhist act of merit, the priest then resumed his walk. He had not proceeded very far when he saw a strange monk come out of a bamboo-grove by the road-side, and hasten towards him. The monk respectfully saluted him, and said:—"Sir, through your compassionate kindness my life has been saved; and I now desire to express my gratitude in a fitting manner." Astonished at hearing himself thus addressed, the priest replied:—"Really, I cannot remember to have ever seen you before: please tell me who you are." "It is

not wonderful that you cannot recognize me in this form,” returned the monk: “I am the kite that those cruel boys were tormenting at Kita-no-Ōji. You saved my life; and there is nothing in this world more precious than life. So I now wish to return your kindness in some way or other. If there be anything that you would like to have, or to know, or to see,—anything that I can do for you, in short,—please to tell me; for as I happen to possess, in a small degree, the Six Supernatural Powers, I am able to gratify almost any wish that you can express.” On hearing these words, the priest knew that he was speaking with a Tengu; and he frankly made answer:—“My friend, I have long ceased to care for the things of this world: I am now seventy years of age; neither fame nor pleasure has any attraction for me. I feel anxious only about my future birth; but as that is a

matter in which no one can help me, it were useless to ask about it. Really, I can think of but one thing worth wishing for. It has been my life-long regret that I was not in India in the time of the Lord Buddha, and could not attend the great assembly on the holy mountain Gridhrakûta. Never a day passes in which this regret does not come to me, in the hour of morning or of evening prayer. Ah, my friend! if it were possible to conquer Time and Space, like the Bodhisattvas, so that I could look upon that marvellous assembly, how happy should I be!”

“Why,” the Tengu exclaimed, “that pious wish of yours can easily be satisfied. I perfectly well remember the assembly on the Vulture Peak; and I can cause everything that happened there to reappear before you, exactly as it occurred. It is our greatest delight to represent such holy matters… Come

this way with me!”

And the priest suffered himself to be led to a place among pines, on the slope of a hill. “Now,” said the Tengu, “you have only to wait here for awhile, with your eyes shut. Do not open them until you hear the voice of the Buddha preaching the Law. Then you can look. But when you see the appearance of the Buddha, you must not allow your devout feelings to influence you in any way;—you must not bow down, nor pray, nor utter any such exclamation as, ‘*Even so, Lord!*’ or ‘*O thou Blessed One!*’ You must not speak at all. Should you make even the least sign of reverence, something very unfortunate might happen to me.” The priest gladly promised to follow these injunctions; and the Tengu hurried away as if to prepare the spectacle.

The day waned and passed, and the darkness came;

but the old priest waited patiently beneath a tree, keeping his eyes closed. At last a voice suddenly resounded above him,—a wonderful voice, deep and clear like the pealing of a mighty bell,—the voice of the Buddha Sâkyamuni proclaiming the Perfect Way. Then the priest, opening his eyes in a great radiance, perceived that all things had been changed: the place was indeed the Vulture Peak,—the holy Indian mountain Gridhrakûta; and the time was the time of the Sûtra of the Lotus of the Good Law. Now there were no pines about him, but strange shining trees made of the Seven Precious Substances, with foliage and fruit of gems;—and the ground was covered with Mandârava and Manjûshaka flowers showered from heaven;—and the night was filled with fragrance and splendour and the sweetness of the great Voice. And in mid-air, shining as

a moon above the world, the priest beheld the Blessed One seated upon the Lion-throne, with Samantabhadra at his right hand, and Manjusri at his left,—and before them assembled—immeasurably spreading into Space, like a flood Of stars—the hosts of the Mahâsattvas and the Bodhisattvas with their countless following: “gods, demons, Nâgas, goblins, men, and beings not human.” Sâriputra he saw, and Kâsyapa, and Ânanda, with all the disciples of the Tathâgata,—and the Kings of the Devas,—and the Kings of the Four Directions, like pillars of fire,—and the great Dragon-Kings,—and the Gandharvas and Garudas,—and the Gods of the Sun and the Moon and the Wind,—and the shining myriads of Brahmâ’s heaven. And incomparably further than even the measureless circling of the glory of these, he saw—made visible by a single ray of light that

shot from the forehead of the Blessed One to pierce beyond uttermost Time—the eighteen hundred thousand Buddha-fields of the Eastern Quarter with all their habitants,—and the beings in each of the Six States of Existence,—and even the shapes of the Buddhas extinct, that had entered into Nirvâna. These, and all the gods, and all the demons, he saw bow down before the Lion-throne; and he heard that multitude incalculable of beings praising the Sûtra of the Lotos of the Good Law,—like the roar of a sea before the Lord. Then forgetting utterly his pledge,—foolishly dreaming that he stood in the very presence of the very Buddha,—he cast himself down in worship with tears of love and thanksgiving; crying out with a loud voice, “*O thou Blessed One!*”…

Instantly with a shock as of earthquake the

stupendous spectacle disappeared; and the priest found himself alone in the dark, kneeling upon the grass of the mountain-side. Then a sadness unspeakable fell upon him, because of the loss of the vision, and because of the thoughtlessness that had caused him to break his word. As he sorrowfully turned his steps homeward, the goblin-monk once more appeared before him, and said to him in tones of reproach and pain:—"Because you did not keep the promise which you made to me, and heedlessly allowed your feelings to overcome you, the Gohotendó, who is the Guardian of the Doctrine, swooped down suddenly from heaven upon us, and smote us in great anger, crying out, '*How do ye dare thus to deceive a pious person?*' Then the other monks, whom I had assembled, all fled in fear. As for myself, one of my wings has been broken,—so that now I cannot fly." And

with these words the Tengu vanished forever.

原案

『^{じっしんしょう}十訓抄』卷上第一 ^{こころのみさおをさだむべきふるまいのこと}可定心操 ^{ひ えいざん}振舞事より「^{てんぐ}比叡山の天狗」
底 本 国会図書館デジタルコレクション『十訓抄新釈』（岡田稔、大同館、昭和14年）
<https://dl.ndl.go.jp/pid/1172649/1/31>

参考資料

- ・『怪談・奇談』（小泉八雲著・平川祐弘編、講談社学術文庫、平成2年）

底本を元に、参照資料を用いながら、現代仮名づかいの読み下し文に書き換えました。
原文からの変更点は以下のとおりです。

1. 旧字を新字に変更。
2. 一部、ひらがなを漢字に、漢字をひらがなに変更。
3. 句読点の一部変更、また一部に空白を入れた分かち書きにしました。
4. ふりがなを劇団のの解釈により付けました。

英語原文

Project Gutenberg

<https://www.gutenberg.org/cache/epub/8128/pg8128-images.html#chap13>

Title: In Ghostly Japan

Author: Lafcadio Hearn

Release date: May 1, 2005 [eBook #8128]

Most recently updated: February 3, 2021

Language: English

Credits: Liz Warren



視聴・購読はこちらから
<https://gekidannono.com>

ご意見・ご感想はこちらへ
radio@gekidannono.com

Podcast のラジオ 好評配信中

劇団ののでは、名作文学を声に出して演技し、収録した音声を Web 上で配信しています。複数名で読むラジオドラマタイプ、単独で読む朗読タイプなど、様々な形で朗読をしています。

みなさんも一緒に朗読を体験して楽しんでいただけるよう、本文に出てくる言葉や物語の解説も、公式サイト上で公開しています。

いつか国語の教科書で読んだ気がする、芥川龍之介・宮沢賢治・夢野久作などのあの作品やこの作品、ぜひ、役者の声でお楽しみください

劇団ののと読む名作文学 小泉八雲作・山宮允訳 『てんぐの話』 Podcast 版

発行日 令和 7 年 12 月 6 日

著 者 小泉八雲作・山宮允訳

編 集 劇団のの

発 行 劇団のの

<https://gekidannono.com/>
radio@gekidannono.com

※本文は、底本の原文を加工したものです。

ゴシック体のルビは、原文に振られていたものです。

底 本 『日本童話小説文庫（耳なし芳一）小泉八雲篇』小峰書店
(1950 年)

初 出 1899 (明治 32) 年

底本 URL

<https://dl.ndl.go.jp/pid/1169083/1/3>

